

友の会 通信

2008.10
No. 87

ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

展示のおしらせ

10月11日(土)～12月26日(金)

❖ 企画展

「酒器しよきに酔うー東アジアの酒文化」

❖ 特集展

「韓国陶磁の美」

❖ 平常展

安宅コレクション中国・韓国陶磁、

李秉昌コレクション韓国陶磁、日本陶磁

沖正一郎コレクション鼻煙壺（新設専用展示室にて）

❖ 休館日：月曜（10/13、11/3、11/24を除く）、

10/14（火）、11/4（火）、11/25（火）

やきものの芸術学 2

芸術作品としてのやきもの

（ここには中国のやきものに対する、制作者の表現の意図が感じられます。やきものを鑑賞する側としては、やきもの素材の持つ性格を理解しなければなりません。やきものは実用の視点からは堅牢性、耐水性、耐酸アルカリ性、などの特質があり、表現の面からは文様や釉色の耐久性、素材の可塑性や重量感、材質感などがあります。しかし、やきものの美的特質の第一は技巧をこえた焼成にあると『飲流斎説盗』（1912）で述べられています。完璧であればあるほど、焼成による偶然性の痕跡が見えにくくなりますが、そこで、やきもの特質がみてとれるのです。焼成過程を経て出現するさまざまな事象こそが、やきもの素材としての魅力なのです。（館長 出川哲朗）

やきもののシンプルな定義は、陶土（磁土）を基体とし、焼成を経た造

形物といえます。素材としての陶土（磁土）を成形したものに、表面に装飾を加え、釉薬を施すこともあります。そして、焼成することによって完成することが、要件といえます。

碗の見込みに「河濱遺範」という印のある宋代龍泉窯の青磁があります。これは『史記』に出てくる舜しゆんの伝説的偉業に由来するものです。舜が河浜でつくったやきものが、まったく歪みのないことを讃えているのです。やきものを歪みなくつくることが困難であるのは焼成という条件があるからです。

歪みのないやきものをつくるのが、制作者にとつての大きな課題です。それは生産地の物原ものばらに散在する膨大な量の失敗作をみれば明らかでしょう。景德鎮の青白磁の窯址や建窯での黒釉磁の窯址、定窯白磁の窯址を見学したときなどに、宋磁の焼成において、どれだけの失敗作が二つ一つの完成品の背後にあるのか見当もつかず、逆に現在私たちが見ることのできる歪みのない宋磁が存在するだけで、それらは大変貴重なものであるという感慨をおぼえました。中国陶磁では歪んだやきものが出荷されることはほとんどありません。

歪みのない陶磁器を目指した焼成技術の進歩によつて、完成品の焼成率は向上していったはずですが、中国の官窯における検品が極めて厳しいものであったことは、明代の御器廠ごきじやう窯址から知ることができます。景德鎮の珠山で、景德鎮考古研究所がかつて発掘した成化年間の御器廠の廃棄坑からは、数万点の「大明成化年製」の銘のある陶片が発見されているそうです。伝世品の成化年製の磁器は極めて少ないことから考えると、完璧なものを目指していたことがわかります。

（ここには中国のやきものに対する、制作者の表現の意図が感じられます。やきものを鑑賞する側としては、やきもの

の素材の持つ性格を理解しなければなりません。やきもの

は実用の視点からは堅牢性、耐水性、耐酸アルカリ性、な

どの特質があり、表現の面からは文様や釉色の耐久性、素

材の可塑性や重量感、材質感などがあります。しかし、や

きものの美的特質の第一は技巧をこえた焼成にあると『飲

流斎説盗』（1912）で述べられています。完璧であれば

あるほど、焼成による偶然性の痕跡が見えにくくなりま

すが、そこで、やきもの特質がみてとれるのです。焼成過程を経て出現するさまざまな事象こそが、やきもの

素材としての魅力なのです。（館長 出川哲朗）

展示室から

企画展

「酒器しよきに酔うー東アジアの酒文化」

重要文化財 五彩金襴手花鳥文瓢形瓶（表紙）

明時代・16世紀 景德鎮窯 高:55.8cm

個人蔵

企画展「酒器しよきに酔うー東アジアの酒文化」では館蔵品を中心に中国、韓国、日本の酒器約30点を通して東アジアの酒文化をご紹介します。とくに今回は、金襴手きんらんての名品として名高い重要文化財「五彩金襴手花鳥文瓢形瓶」が特別に出品されます。金襴手とは明時代の嘉靖年間に景德鎮の民窯でつくられた金彩を焼き付けた五彩磁器に対する日本独自の呼称です。日本には金襴手の優品が数多く伝世していますが、この作品は金襴手の瓢形瓶としては最大級のもです。瓢箪は中国語で「葫蘆hulu」といい、中国では古来、酒器、水入れ、葉入れなどとして用いられ、仙人のシンボルの一つとして知られています。また瓢箪は種子が多いことから、多子多産の吉祥でもありました。嘉靖帝は道教にのめりこみ、この時期に瓢形瓶が流行したのもその影響といわれています。酒器の美に酔いしれるひと時をお過ごし下さい。（H.K）



写真上

澱青釉紅斑環

金時代・12～13世紀 鈞窯

径:9.0cm Acc.No.10646 住友グループ寄贈

写真下

青花 窓絵草花文 面取壺

朝鮮時代・18世紀前半

高:24.7cm Acc.No.21503 安宅昭弥氏寄贈

特集展

「韓国陶磁の美」

本展では、三国時代から朝鮮時代末期までの作品21点を展示します。灰陶からはじまって青磁、白磁、粉青などがあり、器形も変化に富み、また文様も草花文や動物文等々、韓国陶磁の魅力を網羅しています。このなかには、世界で2点しか確認されていない著名な「青花面取壺」（浅川巧旧蔵）も含まれています。

日本では、古代においてすでに朝鮮半島の南部から須恵器の技術を受容していますが、これは、丈夫な実用の器として受け入れたものでした。それに対して16世紀後半の安土桃山時代には、茶人たちが高麗茶碗を「発見」し、その質素なたたずまいにつよく惹きつけられます。近代に入ると、大正から昭和の前期にかけて、朝鮮時代の陶磁のブームが起こります。実用的なやきもの、いささかゆがんではいても素直で温かなその姿、庶民的な生き生きとしたその文様が、あらたに多くの人々を虜にしたのです。

今回の展示は、すべて当館への寄贈品によって構成され、そのひとつひとつに寄贈者の思いが込められています。本展を通して、皆さんも韓国陶磁の魅力を発見されることを願ってやみません。（E.J.）
次回展示予定：
平成21年1月10日(土)～3月22日(日)
特別展「濱田庄司／HAMADA SHOJI
一堀尾幹雄コレクション」

が、大津行きの理由の一つでもある。（M.T.）

大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信 通巻第87号

2008年10月1日発行 No.24-3（年4回）

編集・発行：大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26

TEL.06-6223-0055

http://www.moco.or.jp

デザイン：清嶋滋+studioTWN 印刷：岡村印刷工業株式会社

編集後記

❖ 日中暑い日もありますが、空にいわし雲がよく見られる季節となりました。晩秋の名月もすぎ、本格的な秋を迎えようとする頃に、酒器の展覧会が始まります。今回の企画展ではさまざまなジャンルの方をお呼びして、イベントを企画しております。先日お送りしました葉書でのご案内をお読みの上、お申込下さい。なお、締切日が、各イベントで異なっており

ますので、お気をつけ下さい。皆様のご参加をお待ちしております。（S.S.）

ボランティアの窓

❖ 最近、京都を通り越して、大津通いが続いている。

膳所から大津まで、旧東海道をテクテク歩く。途中の義仲寺では、芭蕉と義仲、それに巴御前の墓参り、大津に着けば、お気に入りの和菓子を買って大満足。三井寺を過ぎ、湖岸に出れば、「中川美術館」がある。通り過ぎてしまいそうな小さな美術館だが、主は、5歳から古銭を集めたという筋金入りのコレクター、行く度と同じ話を飽きもせず聴くの



重要文化財 五彩金襴手花鳥文瓢形瓶

明時代・16世紀 景德鎮窯

高:55.8cm（個人蔵）

